

公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の関連性

(2007年7月26日受付；2007年11月5日受理)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センター
平松 隆円

Relationship between Makeup Behaviors in Public Scenes and Self Deepness of Makeup

Ryuen HIRAMATSU, Collaborative Researcher

National Institutes for the Humanities, International Research Center for Japanese Studies

Abstract

Why do young people makeup in public scenes?

Main purpose of this study was to solve the constructions of young people's makeup behavior in public scenes, and the factors of individual difference and self deepness of makeup that specified them. As a result, it was made clear that structures of self deepness of makeup and makeup behavior in public scenes consisted of "social scene" and "individual scene". For both male and female, "social scene" of makeup behavior in public scenes was specified "social scene" of self deepness of makeup and "individual scene" of makeup behavior in public scenes was specified "individual scene" of self deepness of makeup. For factors of self deepness of makeup which most strongly prescribed factors of makeup behavior in public scene was "individual scene". About individual difference factors, in male, public-self consciousness specified makeup behavior in public scenes. In female, external others consciousness specified makeup behavior in public scenes.

(Received July 26, 2007 ; Accepted November 5, 2007)

Key words: *makeup behavior, public scene, deepness of makeup, differences between the sexes, self-consciousness, other-consciousness*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol.48, pp. 742-749, 2007)

 要 旨

なぜ、若者たちは公衆場面で化粧を行うのか。

本研究では、若者自身の公衆場面における化粧行動の実態を明らかにし、自己化粧の入念度や個人差要因との関連性について検討した。

その結果、公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の構造は、それぞれ対人接触の高低による『社会的場面』『個人的場面』により構成されていることが明らかとなった。また、男女とも公衆場面における化粧行動の『社会的場面』を規定する自己化粧の入念度の因子は『社会的場面』であり、公衆場面における化粧行動の『個人的場面』を規定する自己化粧の入念度の因子は『個人的場面』であった。さらに、個人差要因については、男性では公的自意識が、女性では他の他者意識が公衆場面における化粧行動の各因子を規定していることがわかった。

キーワード：化粧行動、公衆場面、化粧の入念度、性差、自意識、他者意識

I はじめに

場所を問わない、公衆場面での化粧行動は日常化しつつある。

若者は、様々な公衆場面で化粧を行うことについて、どのように考えているのか。平松¹⁾は、その許容の構造を明らかにするとともに、化粧行動や化粧意識とも深く関連する自意識や他者意識といった個人差要因が、化粧行動の許容にいかに関与しているのかについて検討している。

それによると、化粧行動の許容に関わる公衆場面は、行動の内容ではなく場面により構造化され、男女で許容に差のあることが明らかとなっている。そして、その許容には、自己や他者の外面への注意の向けやすさが影響していることが明らかとなっている。

では、なぜ若者は公衆場面で化粧を行うのか。

例えば、女性の場合、加藤²⁾が指摘するように、化粧をする分だけ、男性より身支度に時間がかかる。それを解消するために、公衆場面で過ごす時間を活用しているだけなのか。確かに、新聞紙上などで、公衆場面、特に電車内での化粧を肯定する意見には、忙しい朝の時間の有効活用というものが多くみられる。しかしながら、総務省³⁾の『平成13年度生活基本調査』の結果によれば、過去の調査と比較可能な15歳以上の行動種類別生活時間の推移において、「身の回りの用事」などの一次活動時間や「余暇活動」などの三次活動時間は増加傾向にあるものの、

「通勤・通学」「仕事・学業」などの二次活動時間は減少傾向にあり、必ずしも化粧をする時間の少なさを公衆場面で補っているとは考えにくい。また男性であっても、駅のホームなどでヘアスタイリングや整眉を行う姿を見かけることもある。

米澤⁴⁾は、文化論の視点から、化粧が着こなしになった結果、見せる顔作りに励み、プロセスとしての化粧行動は、完成し化粧をした顔よりも自己を表現するものとして、身だしなみの域を超えた行動であると指摘している。すなわち、化粧が粧いとしての意味を超え、化粧をすること自体が趣味となったため、場面に関わらず化粧を行い、他者にそれを見せているのだという。だとすると、ある公衆場面において化粧をよく行う者ほど、その場面における自己化粧の程度、すなわち入念度は高いという仮説が成り立つだろう。

そこで本研究では、平松¹⁾の研究をふまえ、若者自身の公衆場面における化粧行動の実態を明らかにし、自己化粧の入念度との関連性を検討する。そして、これまで化粧行動⁵⁾や化粧意識⁶⁾に関する研究、また化粧行動許容に関わる公衆場面の研究⁷⁾でも、その関連性が検討された自意識や他者意識といった個人差要因との関連性についても検討を行う。

II 調査の概要

1) 調査方法と調査時期

2006年4月に、関西にある4年制大学の学生を対象に集合法で質問紙調査を実施した。

倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、調査への回答は任意であり、無記名で個人が特定されることはないことを事前に説明した。

2) 調査対象者

調査対象者(年齢の平均と標準偏差)は、男性425人($M=19.13$ 歳, $SD=1.87$), 女性369人($M=18.99$ 歳, $SD=1.58$)の合計794人($M=19.06$ 歳, $SD=1.74$)であった。

3) 公衆場面での化粧行動項目

平松²⁾により、許容度に基づく公衆場面での化粧行動の構造は明らかになっている。そのため、この研究を参考に、大学生が化粧行動を許容する公衆場面として20項目の公衆場面を選定した。そして、それぞれの公衆場面において化粧行動(化粧直し)をした経験を、「まったくない(1)」から「よくある(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

4) 公衆場面における自己化粧の入念度項目

公衆場面での化粧行動項目と同一の20項目において、その場面に行くとき、どの程度化粧を施すかを、「まったく施さない/素颜(1)」から「バッチリ入念に/派手めに(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

5) 自意識尺度

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の「公的自意識」、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の「私的自意識」からなる。

本研究では、菅原³⁾の自意識尺度の21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる

(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことにはあまり関心がない」の項目を除去し、公的自意識10項目($\alpha=.89$), 私的自意識9項目($\alpha=.85$)で簡便因子得点(因子ごとに、高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する)を算出した。

男女差を明らかにするため、Levene検定により等分散性を確認後、t検定を行った。

その結果、公的自意識(男性: $M=3.57$ <女性: $M=3.79$, $t(1.759)=-3.88$ $p<.001$), 私的自意識(男性: $M=3.40$ <女性: $M=3.55$, $t(1.765)=-3.02$ $p<.01$)で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ公的自意識、私的自意識が低かった。

6) 他者意識尺度

他者意識とは他者への注意、関心、意識が向けられた状態をいい、他者への注意の向けやすさに関する性格特性である。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度である「内的他者意識」、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度である「外的他者意識」、他者について考え・空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点付けそれを追いかける傾向の程度である「空想的他者意識」からなる。

本研究では、辻⁴⁾の他者意識尺度の15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ3因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「人の言動には絶えず注意を払っている」「人のことをよく空想する」の項目を除去し、外的他者意識5項目($\alpha=.79$), 内的他者意識6項目($\alpha=.86$), 空想的他者意識2項目($\alpha=.89$)で簡便因子得点(因子ごとに、高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する)を算出した。

Table 1 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の基礎統計量

	公衆場面における化粧行動						自己化粧の入念度					
	男性		女性		性差	t値	男性		女性		性差	t値
	M	SD	M	SD			M	SD	M	SD		
駅のホーム	1.35	0.86	1.90	1.21	-6.76	***	1.75	1.10	2.84	1.11	-13.24	***
学校の授業	1.35	0.87	1.85	1.18	-6.12	***	1.87	1.24	3.24	1.14	-15.46	***
電車のなか	1.31	0.80	2.02	1.31	-8.36	***	1.79	1.14	3.03	1.11	-14.90	***
家族との外出	1.34	0.84	2.02	1.23	-8.22	***	1.81	1.15	2.96	1.17	-13.39	***
友人の家	1.32	0.79	2.07	1.27	-9.02	***	1.87	1.19	3.16	1.16	-14.73	***
アルバイト	1.35	0.84	2.07	1.29	-8.48	***	1.87	1.17	3.23	1.12	-16.05	***
学食	1.29	0.75	1.80	1.17	-6.64	***	1.81	1.16	3.13	1.10	-15.75	***
コンビニ	1.30	0.77	1.44	0.84	-2.22	*	1.67	1.04	2.48	1.11	-10.21	***
異性との外出	1.51	1.07	2.52	1.51	-9.86	***	2.35	1.59	3.90	1.16	-15.02	***
ファミレス	1.36	0.87	1.92	1.22	-6.71	***	1.84	1.18	3.13	1.14	-14.92	***
デパート	1.36	0.86	2.09	1.34	-8.33	***	1.88	1.22	3.43	1.18	-17.40	***
大学のサークル/クラブ	1.34	0.81	2.02	1.26	-8.24	***	1.92	1.25	3.28	1.19	-14.93	***
結婚式	1.42	0.93	2.35	1.46	-9.59	***	2.30	1.58	4.06	1.14	-17.17	***
居酒屋	1.35	0.82	2.05	1.30	-8.26	***	1.84	1.15	3.32	1.13	-17.40	***
通夜・葬式	1.35	0.84	1.66	1.02	-4.21	***	2.03	1.38	2.98	1.07	-10.33	***
近所のスーパー	1.28	0.72	1.47	0.85	-3.01	**	1.69	1.06	2.29	1.06	-7.62	***
同性との外出	1.39	0.90	2.42	1.49	-10.80	***	2.01	1.32	3.69	1.13	-18.47	***
病院	1.31	0.76	1.54	0.92	-3.49	**	1.76	1.08	2.63	1.09	-10.88	***
バスのなか	1.29	0.75	1.71	1.13	-5.54	***	1.78	1.11	2.94	1.11	-13.98	***
公園	1.33	0.81	1.50	0.89	-2.63	*	1.75	1.07	2.68	1.13	-11.33	***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

男女差を明らかにするため、Levene 検定により等分散性を確認後、t 検定を行った。

その結果、内的他者意識(男性: $M=3.36 < 女性:M=3.53$, $t(1.780)=-2.77 p < .01$), 空想的他者意識(男性: $M=3.03 < 女性:M=3.18$, $t(782)=-2.12 p < .05$), 外的他者意識(男性: $M=3.30 < 女性:M=3.53$, $t(1.778)=-3.82 p < .001$)で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ内的他者意識、空想的他者意識、外的他者意識が低かった。

7) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

III 結果

1) 個人差要因の相関

個人差要因である公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識

の、それぞれのあいだの関連性を検討するため、男女別に Pearson の相関係数を算出した。

その結果、男女ともすべての組合せで有意な正の相関が認められた。特に、高い相関係数を示したのは、男女とも公的自意識と外的他者意識のあいだの相関(男性: $r=.69$, 女性: $r=.72$)であった。

2) 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の基礎統計量

公衆場面における化粧行動項目と自己化粧の入念度の評定平均値をみると(Table 1), 男性はすべての公衆場面における化粧行動の経験がないと回答した。他方、女性は公衆場面における化粧行動の経験がない、もしくはほとんどないと回答した。

各項目の評定の男女差を明らかにするため、Levene 検定により等分散性を確認後、t 検定を行った。

Table 2 公衆場面における化粧行動の構造 (主成分分析・Varimax)

	1	2
	社会的場面	個人的場面
異性との外出	0.87	0.23
同性の友人との外出	0.84	0.29
結婚式	0.84	0.27
デパート	0.79	0.40
居酒屋	0.76	0.46
大学のサークル/クラブ	0.76	0.44
ファミレス	0.74	0.50
アルバイト	0.71	0.44
友人の家	0.68	0.44
家族との外出	0.64	0.51
学食	0.61	0.59
電車のなか	0.59	0.51
学校の授業	0.57	0.51
駅のホーム	0.57	0.57
近所のスーパー	0.30	0.87
コンビニ	0.27	0.87
公園	0.35	0.84
病院	0.40	0.81
バスの中	0.47	0.72
通夜・葬式	0.49	0.70
固有値	13.54	1.36
累積寄与率	67.69	74.49
α	0.97	0.94

Table 3 自己化粧の入念度の構造 (主成分分析・Varimax)

	1	2
	社会的場面	個人的場面
結婚式	0.90	0.28
異性との外出	0.89	0.30
同性の友人との外出	0.82	0.44
居酒屋	0.78	0.52
デパート	0.77	0.54
大学のサークル/クラブ	0.76	0.50
アルバイト	0.74	0.52
学校の授業	0.71	0.57
友人の家	0.71	0.57
ファミレス	0.69	0.64
通夜・葬式	0.69	0.49
学食	0.68	0.66
近所のスーパー	0.26	0.87
コンビニ	0.34	0.86
公園	0.48	0.79
病院	0.49	0.76
バスの中	0.59	0.73
駅のホーム	0.56	0.72
電車のなか	0.64	0.66
家族との外出	0.60	0.63
固有値	15.85	1.00
累積寄与率	79.24	84.21
α	0.98	0.94

その結果、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べすべての項目で評定平均値が低かった。

また、男性はすべての公衆場面における自己化粧の入念度の項目で素顔、もしくはあまり施していないと回答した。他方、女性は公衆場面における自己化粧の入念度の「結婚式」でやや入念に施し、その他はどちらともいえない、もしくはあまり施さないと回答した。

各項目の男女差を明らかにするため、Levene検定により等分散性を確認後、t検定を行った。

その結果、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べすべての項目で評定平均値が低かった。

3) 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の構造

公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の構造を明らかにするため、公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の評定平均値をもとに、それぞれ主成分分析(Varimax回転)を行い、構造化を試みた。

その結果、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準に、公衆場面における化粧行動では(Table 2)、「異性との外出」「同性の友人との外出」「結婚式」などが高く負荷する『社会的場面』、「近所のスーパー」「コンビニ」「公園」などが高く負荷する『個人的場面』と命名された2因子が抽出された。そして、この2因子で簡便因子得点(因子ごとに、高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する)を算出し、分析データとした。

他方、自己化粧の入念度では(Table 3)、「結婚式」「異性との外出」「同性の友人との外出」などが高く負荷する『社会的場面』、「学食」「近所のスーパー」「コンビニ」などが高く負荷する『個人的場面』と命名された2因子が抽出された。そして、この2因子で簡便因子得点(因子ごとに、高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する)を算出し、分析データとした。

公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度における各簡便因子得点の男女差を明らかに

Table 4 公衆場面における化粧行動因子と自己化粧の入念度因子の男女差

		男性		女性		性差 t値
		平均値	SD	平均値	SD	
行動	社会的場面	1.34	0.75	2.07	1.02	-10.19 ***
	個人的場面	1.31	0.72	1.55	0.81	-3.99 ***
入念度	社会的場面	1.96	1.17	3.37	0.94	-17.73 ***
	個人的場面	1.73	1.02	2.65	0.93	-12.56 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 5 公衆場面における化粧行動を規定する自己化粧の入念度 (強制投入: β と R^2)

		化粧行動			
		男性		女性	
		社会的場面	個人的場面	社会的場面	個人的場面
入念度	社会的場面	0.35 **	0.21	0.51 ***	0.07
	個人的場面	0.22	0.36 **	-0.03	0.31 ***
	R^2	0.31 ***	0.31 ***	0.24 ***	0.12 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6 公衆場面における化粧行動を規定する個人差要因 (stepwise: β と R^2)

	化粧行動			
	男性		女性	
	社会的場面	個人的場面	社会的場面	個人的場面
公的自意識	0.16 *			
私的自意識				
内的他者意識				
空想的他者意識				
外的他者意識		0.16 **	0.16 **	
R^2	0.02 *	0.03 **	0.03 **	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

するため、Levene 検定により等分散性を確認後、t 検定を行った。

その結果(Table 4)、公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の因子すべてで有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ簡便因子得点が低かった。

4) 公衆場面における化粧行動を規定する自己化粧の入念度

公衆場面における化粧行動を規定する自己化粧の入念度を明らかにするため、男女別に公衆場面における化粧行動の各簡便因子得点のそれぞれを目的変数とし、自己化粧の入念度の各簡便因子得点を説明変数とする重回帰分析を強制投入法で行った。

その結果(Table 5)、男女とも自己化粧の入念

度の『社会的場面』が公衆場面における化粧行動の『社会的場面』を、自己化粧の入念度の『個人的場面』が公衆場面における化粧行動の『個人的場面』を規定した。

5) 公衆場面における化粧行動を規定する個人差要因

公衆場面における化粧行動を規定する個人差要因を明らかにするため、男女別に公衆場面における化粧行動の各簡便因子得点のそれぞれを目的変数とし、自意識や他者意識の各因子得点を説明変数とする重回帰分析を Stepwise による変数選択法で行った。

その結果(Table 6)、男性では公衆場面における化粧行動の『社会的場面』で公的自意識が、公衆場面における化粧行動の『個人的場面』で

外的他者意識が有意に選択された。他方、女性では公衆場面における化粧行動の『社会的場面』で外的他者意識が有意に選択された。

IV 考察

1) 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度

ほとんどの公衆場面における化粧行動項目について、男女とも経験がない、もしくはほとんどないことが明らかとなった。公衆場面における自己化粧の入念度では、男性ではすべての項目で素顔、もしくはあまり施していないこと、女性では「結婚式」でやや入念に施し、その他はどちらともいえない、もしくはあまり施さないことが明らかとなった。

公衆場面における化粧行動、公衆場面における自己化粧の入念度とも、対人相互作用の高低の違いが、その程度を規定していると推測する。すなわち、大坊⁹⁾が化粧の機能として対人相互作用機能を指摘しているが、他者との関係を前提とした化粧が、公衆場面での化粧行動や化粧の入念度を規定していると推測する。

因子分析により構造化を試みた結果、公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度に共通して『社会的場面』と『個人的場面』という、対人接触の高い場面とそうではない場面の2因子の存在が明らかとなった。そして、男性は女性に比べ『社会的場面』や『個人的場面』で化粧をせず、化粧の入念度が低いことが明らかとなった。

菅原^{10) 11)}は、電車内化粧といった行動は、個々に特別な理由や動機があるわけではなく、公衆場面に居合わせる他の人々の存在を気にしていないという共通の背景から生まれており、本来自分の部屋でやるべき行動を人前でも平気で行っている現象と指摘している。因子分析の結果から、電車のなかや駅のホームが若者にとって対人接触の低い公衆場面として、相対的に私的な場面に構造化されていることから、本研究は菅原の指摘を裏付けるものとなった。

公衆場面における化粧行動を規定する化粧の入念度について検討したところ、男女とも自己

化粧の入念度の『社会的場面』が公衆場面における化粧行動の『社会的場面』に、自己化粧の入念度の『個人的場面』が公衆場面における化粧行動の『個人的場面』に最も強い影響力をもつことが明らかとなった。

その理由として、対人接触の高い場面である『社会的場面』における自己化粧の入念度の高さには、対他的な対人関係における印象管理の側面から施した化粧状態を維持しようとする意識が関連していると推測する。しかしながら、対人接触の低い『個人的場面』であっても化粧を入念に施す者は、対人関係ではなく対自的な自己効用の側面から常に化粧をすることが必要という意識をもっていると考えられ、『個人的場面』においても、施した化粧状態を維持しようと、公衆場面で化粧を行っていると推測する。しかしながら、本研究では公衆場面における化粧行動と化粧意識との関連性については検討していない。そのため、この仮説を裏付けるための研究が今後必要である。

だが、本研究により、化粧の入念度の高い場面では、公衆場面における化粧行動も高いという仮説は、裏付けられるものとなった。

2) 公衆場面における化粧行動と個人差要因

公衆場面における化粧行動の『社会的場面』『個人的場面』を規定する個人差要因について検討したところ、男性では公的自意識が『社会的場面』を、外的他者意識が『個人的場面』を、女性では外的他者意識が『社会的場面』を規定していることが明らかとなった。

『社会的場面』を、男女で異なる個人差要因が規定している結果が明らかとなった。その理由として、公的自意識とは自己の服装や化粧など他者が観察しうる自己の外面に注意を向ける程度に関する個人差要因であることから、男性の場合、施した化粧の状態変化に敏感な者ほど、化粧の状態を維持・向上させようと『社会的場面』で化粧行動を行っていると推測する。また、外的他者意識とは他者の化粧や服装、体型やスタイルといった外面に現れる特徴への注意や関心の向けやすさの程度に関する個人差要因であることから、女性の場合、他者の公衆場面にお

ける化粧行動に関心の高い者ほど『社会的場面』で化粧行動を行っていると推測する。すなわち、男性では、他者からどのように自己がみられているかという意識が、女性では、他者がどのような外面特徴をもっているかという意識が、対人接触の高い『社会的場面』での化粧行動に影響しており、公衆場面における化粧行動と自己顕示性や同調性が男女で異なる関連を示す可能性を示唆している。

V まとめ

若者自身の公衆場面における化粧行動と化粧の入念度の関連性を検討した。その結果を要約すると次の通りとなる。

1. それぞれの構造は対人接触の高低による『社会的場面』と『個人的場面』により構成されている。
2. 男女とも、公衆場面における化粧行動の『社会的場面』については自己化粧の入念度の『社会的場面』、公衆場面における化粧行動の『個人的場面』については自己化粧の入念度の『個人的場面』が規定している。
3. 個人差要因については部分的ではあるものの、男性では公的自意識や外的他者意識が、女性では外的他者意識が公衆場面における化粧行動を規定している。

平松¹⁾の研究と合わせ、若者の自己の公衆場面における化粧行動と他者へのその許容が明らかとなった。

今後は、若者が社会一般の公衆場面における化粧行動の認識をどのようにとらえているか、その意識の構造解明と公衆場面における化粧行動との関連性を検討したい。

謝辞

本研究を行うにあたり、成安造形大学牛田好美准教授より有益な助言をいただいた。

末筆ながら深く感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 平松隆円 2006 化粧行動許容に関わる公衆場面の構造解明とそれを規定する個人差要因, 繊維製品消費科学, 47(11), 12-21
- 2) 朝日新聞 2001 「車内化粧」は是非か, 朝日新聞社, 6月29日朝刊
- 3) 総務省統計局 2006 平成18年度社会生活基本調査
- 4) 米澤泉 2001 「化粧センス」を競う女性たち, 化粧文化, 41, ポーラ文化研究所, 20-25
- 5) 平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究(第2報)・大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待と個人差要因, 繊維製品消費科学, 44(11), 69-75
- 6) 平松隆円・牛田聡子 2004 化粧に関する研究(第4報)・大学生の化粧意識を規定する個人差要因, 繊維製品消費科学, 45(11), 63-70
- 7) 菅原健介 1984 自意識尺度日本語版作成の試み, 心理学研究, 55, 184-188
- 8) 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識, 北大路書房
- 9) 大坊郁夫 1997 魅力の心理学, ポーラ
- 10) 菅原健介 2000 視線平気症と若者の羞恥心 恥の文化は失われたのか, 化粧文化, 40, ポーラ文化研究所, 39-41
- 11) 菅原健介 2005 羞恥心はどこへ消えた?, 光文社